

【アメリカ】 最も住みやすい街 ポートランドの街づくり

(TV東京「ワールドビジネスサテライト(WBS)」ほか)

コンパクトな街区、たくさんのカフェ、ほかの都市では見かけないショップの数々、さらに車を10分ほど走らせれば、有機栽培のワイナリーや山や川の大自然が残る。オレゴン州ポートランド市は、アメリカで最も住みやすい街といわれ、若者を中心に年に2万人以上が移り住んでいる。



その暮らしやすさを実現した「街づくり」の特徴が、1979年に設定された「**都市成長境界線**」で、25の自治体が境界線を引き、都市開発する範囲を境界線内に制限している。この境界線により、無秩序な都市拡大を防ぎ、自然や農地の保護に役立ってきた。

都市成長境界線と都市化保留地域



都市部は、全米で最も自転車通勤が多く、路面電車が張りめぐらされているなど、公共交通機関網が充実して利便性の高い「**コンパクトシティ**」として機能している。一方で、境界線の外では、「**農業**」が盛んに行われており、農家は境界線内の住民や企業に向けて新鮮な農産物を供給することで都市部と共存している（全米で最も有名な市場として「ファーマーズマーケット」がある）。



このように、**自然と都市の調和**は、ポートランド市の生活を豊かにしている。なお、この境界線については、人口増加や経済成長などを予測して、定期的に見直されている。

また、「**議会**」は、市議4名と市長の少人数での構成であり（同等の人口規模である東京・八王子市の40名と比べるとかなり少ない）、行政運営の方向性を理解しやすく、自分たちの声を行政に届けやすいなどの特徴がある。



さらに、「**近隣組合**」として、市民の話し合いの場が市の政策決定に関わることが公に認められるなど、街づくりに対する住民の意識が高いことも、ポートランドの特徴である。現在、市内にはこの組織が95あり、その上部組織として地区連合が7つ存在する。それを統括し支援する部署が市役所の中に設けられ、30名の市職員が業務にあたっている。市民への情報提供を行うと同時に、あらゆる市民の声が行政に届くよう、さまざまな支援活動を行っている。



近隣組合の会議の様子



市役所の支所的存在の近隣連合事務所